

# 携帯電話の家族内利用に関する研究

“ケータイ”が創発する家族の内的構成を焦点に

慶應義塾大学 政策・メディア研究科 修士課程 1年

天笠 邦一 mail: kz@sfc.keio.ac.jp

慶應義塾大学 総合政策学部 3年

大島 亮太 mail: s02162ro@sfc.keio.ac.jp

慶應義塾大学 環境情報学部 3年

郷 大助 mail: t02389dg@sfc.keio.ac.jp

---

## 本文要旨:

---

本論は、家族という概念を、社会によって変動する社会的構成物として捉える。その上で、近年急激な普及を果たした携帯電話(以下ケータイ)という新たなメディアと、それによってもたらされる新たな形態のコミュニケーション・インタラクションが、どのように家族の内的構成を創発しているか、文化人類学・エスノグラフィ的視点から綿密な調査を行う事で、明らかにしていくものである。

調査は、個別具体性を重視したケータイ利用者に対するインタビューという形を取り、その家族状況や家族内でのケータイの利用を、緻密に聞き出していく形で行われた。その結果、ケータイを通じた、家族関係の維持・構築の諸相と、その為に個人が行っている高度な戦略が観察された。さらに、若者たちの、家族に対するアイデンティティの依存傾向と、従来の社会構造・場所性の壁を越えた新たな家族モデルへの胎動を思わせる動きが明らかとなった。

以上の分析結果から、今後、家族の情緒的結びつきが強まり他の社会関係が、家族に侵食される、家族化が進んだ「家族の時代」と、家族の情緒的結びつきが破綻し、家族の機能が又一つ失われる脱家族化が進んだ「家族不在の時代」が、同時並行・同時進行でやってくるのではないかと予測するに至った。

## 1. 序論:現代社会における家族とケータイ

### 社会的構成物としての“家族”

日々の生活の中、“家族”とは、多くの人にとって精神的支柱であり、規範であり、最も身近な社会集団である。ゆえに、我々は“家族”とは、人類にとって普遍的な価値と意味を持った何かなのだと信じたくなるし、現にそう信じていることも多い。

家族普遍説とも言うべき、この考え方は、学問として“家族”を考えると、基本的なフレームワークとして用いられていたこともある。しかし、近年、学問分野においては、『“家族”とは、他の様々な社会要素と関連し合い形作られる、相対的な何かである。』という考え方が大勢を占めるようになってきた。家族は、社会によって構成される社会的構成物であるというのである。<sup>\*1</sup>

例えば、家族と国家との関係だ。近代国家はその成立の仮定で、“家族”をそのパートナーとした。つまり、近代国家の基礎となる財産・権利の所有を家族単位で帰属させることで、国家の統合を図ろうとしたのである。ゆえに、近代以後の家族は、国家が定めた制度・法律という社会制度との相互関係の中で歴史的に形作られてきたことができるのである。<sup>\*2</sup>

また、「郊外化」現象の分析の中で語られる家族論も、社会的構成物としての家族を考える上では、代表的な例である。高度経済成長期において、労働者を消費者に代える動きの中で起こった郊外化という現象は、同時に、今となってはほぼ、当たり前のこととして捕らえられている「物質的・経済的豊かさへの欲望を実現する単位としての家族」(1999,三浦)を、実現すべき家族像として産み出した。大量生産・大量消費を支える主体として、家族が社会的に選ばれ、それを実現する為の“家族像”と“家族”が「郊外」に大量生産されたのであ

る。<sup>\*3</sup>

このように“家族”は、国家体制や経済、社会モデルなど、社会の諸要素とのインラクションの中で構築されていく、社会的構成物と現在多くの場面で考えられる。本論においては、社会的構成物としての“家族”という前提に立ち、議論を進めることとしたい。

### “家族”の外的構成と内的構成

上では、国家体制や経済、社会モデルなどとの相互関係より、“家族”は、社会的構成物であると説明した。しかし、国家や経済といった社会要素は、いわば、家族の「外部」にある社会システム・権力関係である。家族をめぐる変化やダイナミズムを本当の意味で理解するためには、そういった外部からの視点の他に、家族という関係性の内部で展開されるコミュニケーションやインタラクションの視点からも家族を理解する必要がある。家族を構成する人々が、如何に外的な社会状況を利用し、どのような方法で、自らが「家族」であるということを提示し合い、どのような関係性を築いているのか。そこで、どのような創発が行われ、社会における家族像にフィードバックされているのか。このような、家族内部のミクロな相互行為・コミュニケーションに関する研究も非常に重要なものである。しかし、このような、家族の内的構造を明らかにする研究は、非常にミクロな部分を扱うゆえに、議論を一般化しにくく、一般的な学問の対象となることが少ない。よって、どうしても外的構造の研究に比べ、潜在的なニーズのわりに、量的に少なくなってしまうのが現状である。

しかし、家族の内的構成を扱った研究もないわけではない。文化人類学の学者たちが行ってきた家族研究は、間違いなくその一部と言えるだろう

し、フェミニズム・女性学の研究者たちが行ってきた家族内における権力関係の分析も、家族の内的構成を考える研究と考えると差し障りない。

しかし、果たしてそれで、十分なのであろうか。十分というためには、家族をめぐる社会状況や、内部のコミュニケーションをつかさどる環境・ツールの目まぐるしい変化を、継続的に、的確に捉えなくてはならない。また、多くの女性学の研究がそうであったように、家族外部の権力関係を明らかにするため、家族の内的構成の研究をするのではなく、まずは、内的構成そのものを理解するような着実な姿勢も求められてくると考える。

#### 「家族」の内的構成のアクター：メディア

それでは、家族に関する内的構成の研究が重要であり貴重であるとするならば、一体どんな切り口から、研究を進めて行くのがよいのであろうか。私は、そのような家族の内的構成研究に「メディア」という切り口視点は不可欠であると考ええる。

そもそも、「メディア」という存在は、家族という社会概念に内部からも外部からも非常に大きな影響を与えてきた。例えば、ここでは、マクルーハン流に「身体の拡張」をもたらすものをメディアとして考えるが<sup>※4</sup>、産業革命以後の鉄道等、公共交通機関の発達、家族からの機能分離を促し、生産と生殖と生活と教育の複合体としての家族という枠組みを外側から破壊して、近代における郊外型家族の基礎を形作ったといえる。<sup>※5</sup>

また、Marvin(1988)や Fischer(1992)が行った、アメリカにおける電話の普及過程に関する綿密な調査研究も、「メディア」(この場合は、電話)の家族という枠組みに対する影響力の強さを考える上では非常に興味深い。その膨大な量の文献および資料調査から、Fischer は、電話が家庭内で

「社交のテクノロジー」として使用されることにより「社会活動の量が広がり社会生活のペースが速まった」(Fischer, 1992)とした。さらに Marvin は、当時の文献から具体的なエピソードを多数抜き出し、電話が如何に当時の家族内にあった「公的な領域と私的な領域」の境界を脅かし、保護された領域としての「家族」を当時の人々がどのように守ろうとしてきたかを生き生きと描いている。<sup>※6</sup>

電話も普及も家族の内的構成に大きな影響を与えたと考えられるが(この問題については、調査分析の項目でもう少し詳細に触れたい。)もうひとつ内的構成に大きな影響を与えたと考えられるのが、テレビの存在である。

テレビは、その普及時から、家・家庭において中心的なポジションを占めてきた。多くの場合、「お茶の間」「リビング」に置かれ、場所的にも、話題的にも、時間的にも、家族内部のコミュニケーション・インタラクションの中心的存在だったといえる。それが、テレビの普及が、家に1つではなく、部屋に1つのレベルになると、テレビを中心に行われていたコミュニケーション・インタラクションが分断された。テレビと言うメディアの普及状況の変化と、それに付随した人々のプラクティスの変化により、家族の内的インタラクション環境が劇的に変化したのである。既に多く言われている議論であるが、メディアの、家族の内的構成を考える上では、欠かすことのできない具体例である。<sup>※7</sup>

#### ケータイの爆発的普及と「家族」への浸潤

その意味で、今日起こっているケータイの爆発的普及は、家族の構成を考える上で十分に留意すべきことだと考えられる。

日本におけるケータイの普及台数は、8346万7800台(電気通信事業者協会-TCA調べ)であ

り、国民数に対する普及率は60%強に及び、単純にはいえないが、あまりケータイを利用しないと考えられる、幼児層などを除いて考えると、社会活動を行っている国民の非常に多くがケータイを所持している計算になる。その普及台数だけを見ても、私たちの家族を含めた日常生活への影響は、うかがい知れそうなものだが、どうやら、ケータイの利用用途として、家族内のコミュニケーションは大きな部分を占めているようだ。次の図を見て欲しい。

図1. ケータイメールの相手

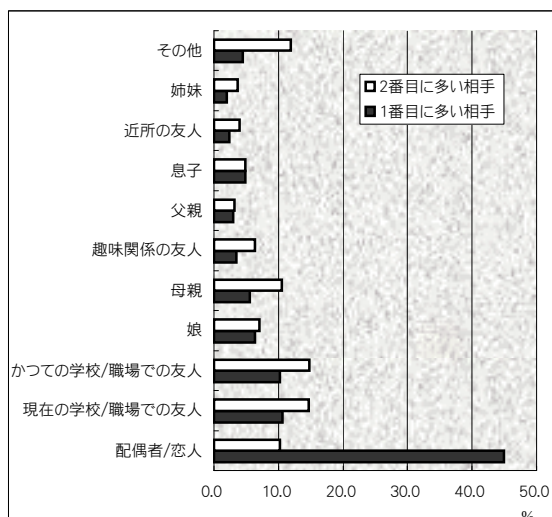
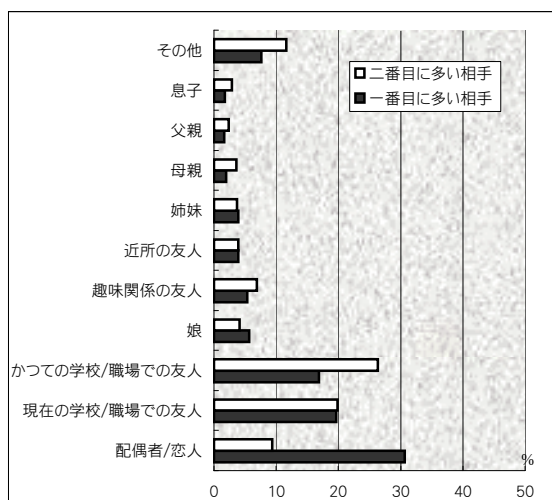


図2. ケータイ通話の相手



以上は、モバイルコミュニケーション研究会が2002年にまとめた調査の結果であり、ケータイのメールと通話の相手を頻度の多い順にまとめたものである。

この調査自体が、コミュニケーション対象の1番・2番を聞くものだったことを考慮すると、非常に多くはないにしても、家族関係者は、どの関係をとっても、ケータイを通して積極的にコミュニケーションを行っていることがわかる。また、母親や娘・姉妹と言った女性家族の利用が多くなる傾向も見られ、特に女性は家族内でも頻繁にケータイを利用しているようだ。

しかも、このような家族内でのケータイの積極的利用は、ケータイの普及台数が急激に伸びた90年代半ば以降の事だと考えられる。(それ以前の普及台数が少ない時期は、導入コストも維持コストも高いため、ケータイの用途は、ビジネスがほとんどであった。)ということは、私たちは、この約10年の間に、家族におけるコミュニケーション環境の一部として、ケータイを受け入れ(もしくは反発し)一定の利用状況を生み出しているということになる。(もしくは、生み出し続けているということになる。)

この、今もリアルタイムで起こっていると考えられる、家族という「社会集団」への、ケータイという「メディア」の急激な受容のプロセス、とその結果生み出されるコミュニケーション・インタラクションは、研究・調査・分析の対象として十分に意義のあるものだと考える。

### 家族とケータイの創発的關係

さらに、ケータイというメディアにおいて興味深いのが、ケータイが持ち運び可能な「一人一台」というパーソナルなメディアであるという点にある。これまで、ケータイのように「一人一台」という利用状

況にあるメディアは、ほぼ存在しなかったといつてもよい。最近のテレビが、それに近い状況にあるかもしれないが、ケータイは、いわば個人の情報を詰め込んだ、自らの履歴をも表現しうるその人「だけ」のもの、利用者の分身のような存在でもあり、メディアの中でも稀有な存在と言えらるであろう。

そのようなバーチャルではあるが、自己の「分身」という存在は、家族が家族であると示しあうコミュニケーション・インタラクションの環境、即ち家族の内的構成に大きな変化をもたらすと考える。

即ち、ケータイ=自分の分身を手にするという行為は、私たちにとっては、自己に匹敵するくらい主体的にインタラクション (E.ゴッフマン流にいうのであれば、印象操作<sup>\*\*8</sup>) を引き起こせる効果的ツールを一つ獲得するということであり、内的構成を作り出すインタラクションの幅・選択肢がケータイ以前に比べて広がるということを意味する。ケータイというメディアを通じて、家族の新たな構成が、今、まさに作り出されようとしているのではないだろうか。本論では、そのような、ケータイによる家族関係の内的構成の創発という現状が起こっているという仮定に基づいて調査・研究を行っていくものとする。

## 2. 研究のフレームワーク

### 2-1. 研究目的

序論で述べた、現状認識・問題意識に基づき、本研究では、ケータイの家族内での利用とそこから生み出されるインタラクションに着目し、どうやって家族という枠組みを内部から維持・構築していくのかを、個別具体性を重視した、聞き取り調査等を通じて明らかにすることを目的とする。

今回は、特に高校生から大学生の女性と母親

とのコミュニケーションについて着目し、その二者の関係を中心に研究を進めることとする。この二者の関係に着目したのは、序論でも述べたとおり、女性はケータイの利用度が高く顕著な傾向が見えやすいことが予想され、研究の初動としては、傾向がつかみやすいと考えたこと。さらにまた、高校生から大学生の年代は、ケータイのヘビーユーザーでもあり、同様にケータイを解した独自のインタラクションが導入されやすいと考えたことに起因する。さらに、この時期は、一般的に自立への第一歩を踏み出しやすい時期であり、コミュニケーションや家族の問題が起こりやすい時期でもある。そういった問題に対して、本研究が、何らかの示唆を与えられれば幸いである。

### 2-2. 概念的フレームワーク

本研究では、伊藤・岡部(2004)が主張するように、Richard Ling/Birgitte Yttri (2002)が提示する”Hyper-Coordination”と言う現象は、ケータイを使う全世界の人々(特に若者に)に共通する現象だと考える前提に立つ。

Hyper-Coordination とは、ケータイを道具的に使用する他に、表出的<sup>\*\*9</sup>に利用したり、それを通して、積極的に自己のプレゼンテーションを行ったりする現象のことを言う。すなわち、ケータイというメディアと、それを介したコミュニケーションを通じて、自己同定や、自己呈示を、主体的に行っていく態度のことであり、具体的には、一見「意味がない」と思われる軽いコミュニケーションを繰り返すという行動の中に読み取れることが多い。

これらのアイデアは、筆者が以前に日本の大学性を対象に行った、インスタントメッセージの利用状況調査(2004)においても、非常に一般的な現象として見られ、今回の研究にもこの考え

方を導入する妥当性は高いと考えられる。

Ling/Yttriはこの”Hyper-Coordination”に対応する概念として、さらに”Micro-Coordination”という概念も導入している。これは、主に年配層で想定されるケータイを用いた日常生活の予定・仕事のマネジメントとそのインタラクションを指す。本研究では、この概念も導入し、親子の間で起こるケータイコミュニケーションを、この二概念を用いて整理しスムーズな議論展開を図りたい。

またその”Hyper-Coordination”の概念は、羽淵(2002)の言うケータイにおける再帰性<sup>\*10</sup>の議論にも共通する部分があると考えられる。これらの議論・考え方も十分に活用しつつ、議論をまとめきたい

最後に、本研究の中で、もうひとつ前提としたいのが、コミュニケーション・インタラクションの「戦略性」である。個人は、多くの場合で、その場の文脈情報を適切に理解している。そして、その上で、自らが望む形で、自己を印象付けようと、高度に戦略的なインタラクション・コミュニケーションを行っているのである。よく、誰かの発言に対して、「場違いだ」「場を読んでない」など評価が下されることがあるが、そのような評価が下されるということは、それ以外の発言は、「場にあった」「場を読んだ」ものであるという事といえる。当たり前すぎるものを通して、人は戦略を練り実行し、そして関係を築きあげているのである。

先にあげた、E. ゴッフマンの「印象操作<sup>\*8</sup>」の概念にも対応するこれらの振る舞いは、元来、対面式のコミュニケーション環境を想定したものであるが、当然、ケータイなどメディアを介したコミュニケーション環境においても、当たり前に行われていることだと考える。ここでは、そのケータイのインタラクションの戦略性 -どのように戦略的に家族を構築・明示化しているのか、もしくは破壊しているのか- について考えていくこととする。

## 2-3. 研究・調査手法

上記の研究目的・概念的フレームワークを達成するために、本研究では、家族内でのケータイ利用に関する、詳細な聞き取り調査を行った。調査の詳細は以下の通りである。なおインタビューは逐語で文字に起こし分析の対象とした。

表1:調査概要

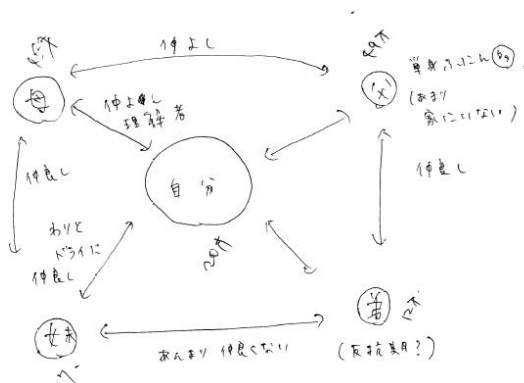
- ・ 調査対象者数: 16 名
  - × 内訳:
    - 中学生 1 名(男性 1 名)
    - 高校生 6 名(女性4名・男性2名)
    - 大学生 3 名(女性4名・男性1名)
    - 社会人 6 名(学生の母親5名・男性1名)
  - × 調査対象者の居住地:
    - 神奈川県下、横浜・藤沢周辺地域
- ・ インタビュー時間: 約1時間半 / 回
- ・ インタビュー実施場所:
  - 街の喫茶店もしくは調査対象者の自宅
- ・ インタビュー内容:
  - × ケータイの基本的な利用状況について
  - × 日常のライフスタイルについて
  - × 家族内でのケータイの利用状況について
  - × “家”でのケータイ・メディア利用について

なお、本調査においては、より調査を有意義なものとするために、2つの工夫をインタビューに盛り込んだ。

一つが、調査協力者に、家族の人物相関図を書いてもらうという作業をお願いした事である。こ

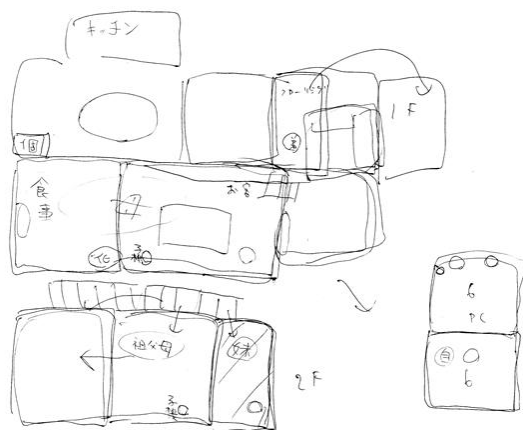
の作業によって、その人が考える「家族」の範囲を明らかにすると共に、普段可視化されない家族関係を可視化することで、観察可能性を高め、インタビュアーにとってもインタビューにとっても、受け答えがしやすい環境を作った。

図3: インタビュー時にお願した人物相関図の例  
(大学2年生、女性が描いたもの)



二つ目の工夫が、家の間取りを、人物相関図と同様に書き出し、それを下敷きに、各メディア(テレビ・固定電話・ケータイ等)の置き場所を整理していった事である。これも一つ目の工夫と同様に、イメージしにくい、家の中の様子を可視化し、観察可能性を高めるのに役立つと考えている。

図4: インタビュー時にお願した家の間取り図の例  
(大学2年生女性が、描いたもの)



### 3. 調査結果の分析と考察

さて、それでは、実際に行った調査の分析と考察に移っていきたい。

関係性を、親子間ということで区切った場合、そのコミュニケーションの類型として、聞き取り調査の中で一番特徴的だったのが、「今どこメール」である。「今どこメール」とは…

1. 子どもが自分から、今の居場所を報告する。
2. 子どもが、門限や約束の時間を過ぎても帰ってこない、もしくは連絡がなかった場合に、「今どこにいるの?いつ帰ってくるの?」という内容のメールを主に母親がする。

以上の2つをその定義として考えるが、要は、子どもの位置情報を親子間で共有するためのプラクティスである。この様な活動は、今回インタビューを行った家族が、ほぼ全員参与していた活動である。ここで少し、インタビューの中でのこの活動に関する発言を眺めてみたい。

#### ◆ インフォーマント: 大学2年生男性 N

(インタビュアーは、天笠[以下 A] 以後特に断りがない限り A はインタビュアーの天笠の略)

N: あー、まず(帰りは)駅に着いたら親に「駅に着いたよ」ってメールします。

A: へえ、それはなんかこう家の準備とか…

N: そーいうのもありますね。例えば駅に着いたときに連絡すれば、「あ、醤油が切れてた」っていう時とかも…

A: あ、どっちかというとなんて言うか自分の利益とかではなく、家にとって便利なのよっていう感じか、じゃあ一つ連絡を入れることがもう習慣みたいになってるんだ?

N: そうですね、はい



いるのではないかと考えている。「帰るコール」とは、ケータイで、通常無意味なメッセージのやり取りを通して行われているような”Hyper-Coordination”・表出的コミュニケーションを、意味のあるメッセージのやり取りである”Micro-Coordination”に、偽装（実際に Micro-Coordination としての役割も果たしているが）することで、日常 Micro-Coordination しか行わないような、ビジネスマン層にも受け入れやすくなったものである。「今どこメール」にしても、その方法論は一緒で、自分と同世代とは、同じ方法論が取りにくい両親の世代に対して、Micro-Coordination を偽装して、表出的コミュニケーションを図っているのではないだろうか。

しかし、それにしても、ここまでの「束縛」を一般的に子どもたちが受け入れていることには、疑問の残るところである。私は、この問題を解決するキーポイントとして、現在の家族に多く見られると考えられる「母親をハブとした家族の情報システム」の存在を挙げたい。

土橋(2005予定<sup>\*12</sup>)は、家族とケータイの関係性について、ケータイは「主婦の主婦性を再生産する」という見方を示した。ケータイの持つ、非線形的なユーザビリティは、パソコンなど時間と場所を線形的に占有しやすいメディアに比べて、家事労働になじみやすく、その結果、主婦(というよりも家事労働者)はケータイを通して多くのコミュニケーションを取る(現に取っている)という結果を生み出す。しかし、そのコミュニケーションは、主婦(家事労働者)の特性をより強化するものであり、より、その立場も強化されると考えたのである。

主婦という概念が、現代の家族像に会っているかはともかくとして、家事労働が依然として多い女性とケータイの親和性ということに関しては、非常に説得力のある議論である。

元々、今回の調査でも、電話に関する多くの先

行研究でも触れられている事であるが、女性たちは、電話(固定)や近所付き合いを通して、家の情報のゲートキーパーの役割を果たしてきた。その機能が、土橋の「主婦の主婦性の再生産」の一環として強化され、もはや、家族という情報システムは、母親という存在によって統合されているといっても過言のないような状況になっているのではないだろうか。

現に今回のインタビューにおいても、家族内の情報は、一度母親に集約される傾向にあった。(反対に、父親は、メディアの面からも、対面式でも家族の情報から隔離される傾向がある。)ケータイの登場によって、母親以外の家族とも直接コミュニケーションがとれる環境が整っているのにも関わらずである。

このような状況が、現実には起こっているとすれば、キーマンである母親からのコミュニケーションを拒否するという行為は、家族という情報システム即ち、家族という価値を提供しあう相互行為から外れるということを意味し、最も身近なアイデンティティ提供先である「家族」からのアイデンティティ提供を逃してしまう結果にもなりかねない。よって、彼らは、束縛という代償を払いながらも、積極的に「今どこコール」というプラクティスに参与しようとするのではないか。

「今どこコール」のプラクティスを拒否するようなインタビュー内容もあるにはあった。下の引用を見ていただきたい。

◆ インフォーマント：社会人女性(主婦) M

(R: インフォーマントの次女)

M: 家族って言っても、R の帰宅時間の文句。それがほとんど。

A: あははは。決まった時間を過ぎると必ずメールを入れるように?何時くらいになるとメールしま

すか？

M: 大体11時くらいになるとメールをするようにしているのですが、で、応答なしだと何回も。。。そのときは、ものすごい量はいれているんですけど。

A: じゃあ、Rちゃんをせかせるような感じで。

M: そうですね。連絡しなさいみたいな。

A: そういうときって R ちゃんどういう対応されますか？

M: まったく無視のときがありますね。とかあとつながらない。留守電にしちゃってる。で、なんでもないときは、メールが帰ってきたり、電話で今ここだからこれくらいに帰るとはいいですけど。

A: なるほど。そういう時ってメールと通話どちらも使う感じですか？

M: メール送っても返ってこないで電話。で、留守電になって出ないと、何で留守電になっているの？とかいうメールをまた入れる。連絡つかないでしょ。見たいな感じでいれるんですけどね。

A: じゃあ、Rちゃんとしても返せるときは返すという感じなんですかね？

M: 友達と話しているときに入るとわずらわしいから入れないみたいな感じで。留守電にしちゃったりとか

A: おかあさんとしたらできればそういうのは避けてほしいと。

M: なんのためにケータイ持っているの？とかいうんですけどね。

<中略>

A: ああ、じゃあRちゃんとしては、あの心配してくれるのはわかるんだけど、ちょっとうるさいなっていう。じゃあ、Rちゃんとしては、どっちの面も覗かせる感じですかね？心配してくれてありがたうという事と。うるさいという部分と。

M: そうですね。だけど、この子もなんでも話をす

るんですよ。だから余計心配な部分も出てきちゃって。相談にのってなんていってくると、あつ、大丈夫かしらまた、自分を責めたりしないかしらって変な風に考えちゃうんでね。

但し、この例も、「今どこメール」をすべて拒否している訳でなく、アイデンティティの提供先としての価値は失わないようなバランスを取って拒否しているとも考えられる。また、この例で面白いのが、この中には出てこないのだが、実は、この母親は、娘からの返答がない場合、何時になっても、寝ずにリビングで待っているということを習慣化しているということである。当然のことかも知れないが、娘がアイデンティティの供給先として家族を選ばなくなるといことは、その家族の情報システムの中心にいる母親にとってもリスクであるはずである。この例は、娘の方が、一瞬破綻させた家族関係を維持構築する表出的コミュニケーションを、立場的には強いはずの母親が折れることで回復させている特徴的な例とも言える。

## 場所性の破れと”家族”の拡大

次に以下の、インタビューのトランスクリプトを見ていただきたい。今回のインタビューの中で、非常に興味深く感じた2つ事例である。

◆ インフォーマント：社会人女性(主婦) M

(R: インフォーマントの次女)

M: あのアルバイトなんかしてて、結局 R が一番下で、大学生ばかりの所で働いていたんですね。で、結局話も合わないし、で、自分ひとりぽつとしてると話に入ってこなくて感じ悪いみたいなことを言われたり突つかれるん

ですよ。そういうときにメールが来るんですね。今すごい落ち込んでるっていうような感じで。あっ、大丈夫?あんまり気にしないでね。っていうようなメールを入れたりであるとか。。あの自分ばかり責めちゃだめよってメールを入れたりするんですけどね。

A: ああ、それは勤務中とかでも、ちょっと手が空くと?

M: あっ、トイレ行ってきます。とかいってちょっとつらいなって言うときにいってくるんですね。ホントに心配はするんですけど。

A: まあ、言ってくれるだけ安心かな?と

M: そうですね。でも余計な心配もしちゃうみたいな...

A: えっとそうですね。結構そういう回数は多い感じですかね?

M: そうですね。友達とけんかしちゃったみたいなきも入れてくるときもあるし。まったくケンカしても入れてこないときもあるんですけどね。自分の中で消化しきれないとき。近頃は強くなってきているみたいなんですけど、いろんな人と付き合っただけ。だけどそうじゃないときは持って行き場がなくて、私のところにもってくるんだと思うのね。そういう時は、あんまり頭から言っちゃいけないと思うので、ソフトな感じメールを返してる。

A: お母さんとしても、もし R ちゃんからそういうメールが来た場合には、即答するというか、なるべく早く返すように心がけている?

M: そうですね。即返してます。

A: お母さんは普段、家の中ではケータイを持ち歩かれていますか?

M: あっ、もう常に。ズボンのポケットに。入れてるって感じです。

A: そういう心配もあって常に肌身離さずって感じですかね。

M: そうですね。

A: R ちゃんが外に出ているときは、ホットラインとかそういうような意味合いもある感じですかね?

M: そうですね。

#### ◆ インフォーマント: 社会人女性(パート) T

A: お姉ちゃんから、ケータイを通して、電話とかメールとで相談事を持ちかけられることはありますか?

T: もうしょっちゅう。だからそのお友達同士のことで、いちいちこういう風に言うんだけどどういう風に行ったらいい?って。それじゃお母さんの言葉になるんだから、自分の言葉に直してよってよね。って。そういうメールは大変なんです。もう慣れましたけど。

A: それはおねえちゃんにとっては、時間带的にはいつ頃なんですか?

T: もう休み時間とか。

A: じゃあ、丁度学校が休み時間になった頃に、メールを見るとお姉ちゃんからだって...だからそのときにはしょっちゅうポケットに入れてないとだめみたい。そんな友達関係やめてみたい。(笑)もうそれで帰ってきてからも、こうこういう風に言って来たんだけど、どうやって返事したらいいと思う?とか。そんな夕飯の支度だっけしなきゃいけないのにみたい。

これらの例は、従来の社会が持っていた、場所性が侵食されていく過程で、これも従来型の社会集団であるはずの家族が、強化されるというパドックスを提示してくれているという意味で、非常に興味深い。

場所性という概念は、近代から高度経済成長にかけて非常に重要な概念であった。なぜならば、

場所にある特質を持たせて、その場所を専門化させることによって、生産等の効率性を高めてきたのが近代や高度経済成長という時代だったからである。(この辺りの考え方は※5 に書いた、移動力の革命という話に繋がってくる) 職場や学校と場所は、まさにその際たるものであり、専門性が高度に重視された空間(つまりは部外者禁止)の空間であった。家族という空間も、その力学構造の中に練りこまれ、近代や高度経済成長という時代を支える一翼を担っていたはずの社会集団なのである。それが、個人レベルのプラクティスでは、「家族」という枠組みにとっては十分にプラスになる形で、旧来の場所性を侵食し始めているのである。これは、マイクロつまり、システム的の下部レイヤーである現実のコミュニケーション環境から、新たな家族像が生み出される前兆なのではないか。宮台は、彼自身が記すブログ<sup>\*13</sup>の中で、『家族』が進む道を「自明な家族から、再帰的な家族へ」と述べているが、その胎動が、ケータイを通したマイクロなコミュニケーションの創発から、生まれつつあるのではないだろうか。

#### ■ nLDK 型住居の補完機構としてのケータイ

今回の分析の最後として、家の中のケータイの「場所」と、家族との関係性の問題についても少し考えてみたい。次の 2 つのインタビューからの引用を初めに紹介する。

#### ◆ インフォーマント：社会人女性(パート) T

リビングにいつも置いてあるバックの中が定位置の自分のケータイを子どもたちが、使用しているという話の続き…

A: 結構勝手にとってっちゃう感じですか?

T: そう、勝手にやってんの。

A: それは、断りなくてもお母さんの方でも…

T: いや…別に、なんだけどなっていうから、別にいいよっていうと。ま、だから一応は言ってる。勝手にどこかもってっちゃって使うってことはなくて、いいって言うからいいよ。って。だから断ってますね。(笑)

<中略>

T: で、私は着メロが飽きるとおねえちゃんの方で勝手に入れてくれるんですよ。

A: あっ、じゃあ、お母さんのケータイは家族みんな使っている感じですか?

T: そうですね。いい加減に。

A: 結構楽しみながら使っている感じですか?

T: そうですね。みんな機種が違うから誰のが使いやすい使いづらいとかいいながら。。

#### ◆ インフォーマント：高校3年生女性 I

A: お母さんのケータイって何処においてある?

I: 私の置いたところにあります。メールが着たら私がみて、返事を返してあげるんです。私の知っている人からしか来ないから、なんとかって言ったからって…

A: なるほど、お母さんに連絡しておくんだ。

<中略>

A: お母さんのケータイって何処においてあるの?

T: お母さんのケータイは、ここ(Tの部屋の、真横が両親の寝室であり、その一角を指して)が棚なんですけど、そこに親機と一緒にあります。

A: なるほど、さっきお母さんのケータイになったら出ちゃうみたいな話をしていたけど、ここ(Tの部屋を指して)いると鳴ったなあと思って、取り

に行って返しちゃう感じ?イメージ的には。

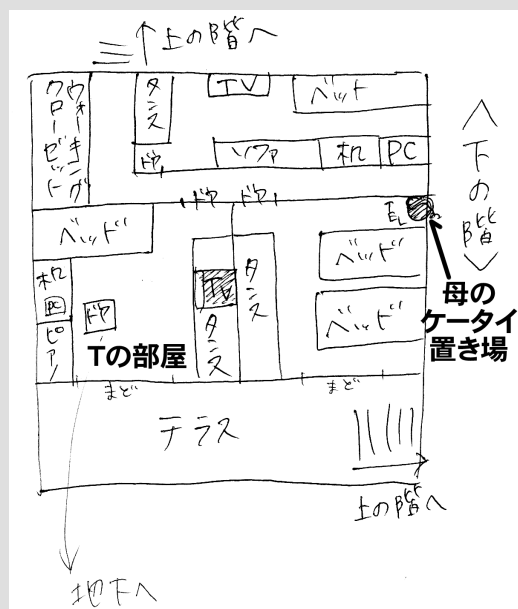
T: そうですね。お母さんが気付かないんですよ。いつも。で充電器がここにあるので、そこから取って使って上についてここら(リビングの机の上)辺に置きちゃうんですよ。そこからは机の上、みたいな感じで。

A: あっ、じゃあ、前もって又返してないんじゃないかなあとか思って、入ってみちゃうってことは?

T: ああ、余り鳴らないんですけど、お姉ちゃんから連絡があるんで、たまに見に行って自分のケータイみたいに2個ポケットに入れておく。

A: ああ、じゃあケータイ係みたいになっているんだ。大変だねー。

図 5: T の書いた自宅の様子の一部  
(ゴシック体の文字は、筆者の解説)



ここで注目したいのが、(主に母親が行っていた)自らのケータイの利用を子どもに開放し、比較的自由に使わせるプラクティスである。

個人情報の固まりであるケータイの共有という現象は余り日本では想像できないが、実は、海外特に北欧では一般的行為の様である。<sup>※14</sup>

ケータイの契約の形態が違うなどの理由もあるようであるが、「ローカルなインタラクションへのケータイを通した参与」つまり、ケータイをツールとして、ローカルな対面式コミュニケーションを行うことが、北欧ではより一般的名のではないかと言う分析もある。

本論では、この北欧でのプラクティスは、量の多少はあるかもしれないが、ケータイの使用においては、比較的普遍的なものであるという立場を取りたい。つまり、日本における、「家」の内部での、ケータイ端末の共有は、何らかの形で、「家」の内部でのインタラクションに影響を与えていると考える。

では、どのような影響があると考えられるのか。私は、それを考える上で、母親のケータイが置かれる位置を考えたい。

吉見ら(1992)は、その著作『メディアとしての電話』の中で、電話コードの長さの問題を扱った。個人の話題を扱う電話は、社会の個人化が進む過程で、みなが集まるリビングなどから「逃げる」ために、そのコードを伸ばしていったというのである。(その後、コードレス化して、家族の共有物としての固定電話の個人化は完成された。)

ケータイの場合は、その固定電話の例とまさに逆の発想なのではないだろうか。元々個人所有の物を、共有する事によって、自らをあえて弱い立場におく、そのことによって得られる信頼感や一体感を、家族という社会システムの統合に戦略的に利用してのではないかと私は、考える。特に、引用したインタビューの後者の、共有の仕方には、注目したい。この例の場合、メディアの置き場所によって、プライベートな空間であるはずの、両親の寝室に、子どもを招き入れる事に成功している。つま

りは、住居を共有空間と個人空間に分断するnLDKという建築様式を、心的距離と距離という意味で破壊する事に成功しているのではないか。インタビューによる裏付けだけでは、断言できる事ではないが、興味深い現象として、今後も追っていくべきものだと考える。もし、これがある程度の合理性をもって説明できたとすれば、これは、郊外化の過程で生まれた、均質化・個人化の象徴としての”家”という概念を、家族の情緒面での再統合という流れの中で、再構築することが出来るかも知れないと考える。

#### 4. まとめと今後の課題

##### ■ 今後の研究課題

今後の研究課題としては、まず、より完全に、ケータイによる家族の内的構造を記述を目指そうとするのであれば、現在のインタビューという手法だけでは、不足であるし、インタビューの対象者も、今回のような、女性中心では、完全ではないということであろう。”家”におけるケータイの場所と家族関係を、より確かにしていきたいのであれば、”家”への参与観察なども視野に入れていかなければならない。それに、概論としても、まずは、男性へのインタビューの強化ということは、必須であろう。今後、この研究はまだ継続予定であるので、これらの反省点を踏まえ、調査の質・幅・量共に充実させ、さらに研究を実り多きものにしていきたい。

##### ■ まとめ

私は、今回の家族におけるケータイ利用の調査

とその分析から示される事実は、家族と社会の2つの方向性を現しているのではないかと考えている。

一つが、ケータイがもたらす、”Hyper-Coordination”，家族の再帰性の高速化により、近代から現代にかけて進んできた情緒的側面での家族関係の強化が、他の社会構造を侵食するくらい、より一層進み、家族における情緒的結びつきが、社会の安心と安定を支える構造となる「家族の時代」と呼ばれるような時代が、日本においてもやってくるという方向性。もう一つが、逆に、家族の情緒的結びつきが破綻し、家族が持っていた機能がさらに失われていく「家族不在の時代」がやってくるという方向性である。

おそらくこれらは、同時にやってくるであろう。今まで見てきたとおり、ケータイは、強く表出的コミュニケーションをサポートする能力を持っている。しかし、サポートする能力を持っているということは、逆に表出的コミュニケーションを、破綻させる能力を強く持つということである。

いずれにしても、ケータイが創発させる、家庭的内的構成の変化を、今後も注意深く見守りつつ、家族と社会の行く末をしっかりと考えていかなければならない。今後の課題でも述べたが、本研究は、まだまだ不足部分もあり、そこを補完する意味でも今後、研究を継続予定である。

#### 5. 注・参考文献

##### ■ 注

※ 1

家族という概念が、社会の構造に依存するという考えは、そもそもマルクス・エンゲルスの唯物史観に由来するものである。その解釈も

- 含め、家族の概念の歴史的変遷は、戸谷修著『家族の構造と機能』（風媒社、1972）に詳しい。
- ※ 2  
近代家族形成における国家の影響については、西川祐子『近代国家と家族モデル』（吉川弘文館、2000）の I-1(pp9-pp70)に、詳しく説明されている。
- ※ 3  
「郊外化」に関する詳しい説明とその影響は、三浦展『「家族」と「幸福」の戦後史 -郊外の夢と現実』（講談社現代新書、1999）の内容がわかりやすくかつ詳細である。
- ※ 4  
マーシャル・マクルーハンは、メディア論に関するひとつのパラダイムを作った学者として有名だが、彼は、ラジオを聴覚の拡張などと位置づけて行く中で、人間の身体・五感の拡張をするものをすべてメディアであると位置づけていった。そんな彼の主張は、『メディア論 -人間の拡張の諸相』（1987、みすず書房）詳しい。
- ※ 5  
産業革命に関する書籍・論文や、マクルーハン系のメディア論の中でたびたび述べられてきたことだが、産業革命とは、移動の革命であるといえる。すなわち、鉄道に代表される交通機関の発達により、原料・労働力を集約しての大量生産・大量消費が合理的な選択肢となった時代であった。その為、核家族に分散して置かれてきた生産の機能が、家族から引き離され、分断されたのである。この結果、農村から、労働力の集約地点であった都市に大量に人口が流入することとなった。この揺り戻しの現象として、郊外化は位置づけることも出来る。
- ※ 6  
Marvin と Fischer の電話と家族との関係に関する議論はそれぞれ、『古いメディアが新しかった時』（2003、新曜社）の第 2 章、『電話するアメリカ』（2000、NTT 出版）の第 8 章に詳しい。
- ※ 7  
テレビと家族（特に子供との関係性）については、濱野・網野編『子どもと家族』（中央法規出版、1995）の第七章に詳しい。二人は、この賞の中でテレビは『「家電」から「個電」になった』とし、個人化・パーソナライズの流れの中でのテレビというメディアについて論じている。
- ※ 8  
E.ゴッフマンは、コミュニケーションを行うものは、その場に「適切な」行為を知っている、もしくは学習する機構を備えており、そのルールに従って、自らを、自らが望む姿でコミュニケーション対象に提示する努力を常に行っていると考えた。このような一連のインタラクションを「印象操作」という用語で呼ぶことがある。
- ※ 9  
表出的とは、そのコミュニケーション行動を通じて、意味内容を伝えようとするよりも、互いの関係性を確定しようとする態度のことを言う。
- ※ 10  
再帰性とは、羽淵によれば「個人の行為が他者や所属集団に影響を及ぼして、何らかの変容を起し、その変容がまた個人に影響を及ぼすという循環」であり、その循環をすべて人間は、モニタリングした上で行動を起こしている(A.ギデンズ)と考える。その意味で、コミュニケーションの中から、自己を自己同定・自己呈示を行う Hyper-Coordination の議論は、この再帰性に関する議論と非常に近

い議論だと考えられ、ここでは、ほぼ同一のものとして扱いたい。ケータイは、その再帰性を「いつでも、どこでも、誰とでも」というメディア特性によって、高速化させる力があると、羽淵は分析している。

※ 11

郊外化・成熟社会と若者に関する問題は、宮台真司『まぼろしの郊外-成熟社会を生きる若者たちの行方』(朝日文庫, 2000)に、宮台自身が行ったフィールドワークと共に紹介されている。事例と共に問題を把握できるという意味では貴重な一冊である。

※ 12

松田・土橋の本論中に取り上げた議論については、参考文献にもある2005年春刊行予定の伊藤瑞子他編「Personal, Portable, Pedestrian」に詳細が掲載予定である。

※ 13

アメリカでは、WEBジャーナリズムの中心とされるWEBにおけるパブリッシングシステム。日本では日記と証される事もあるが、評論家たちのそれは、まさに自分の意見をまとめた個人ジャーナリズムであるといえる。ちなみに、本文中で紹介した宮台真司氏のBLOG URLは<http://www.miyadai.com/>

※ 14

北欧におけるケータイ端末共有の状況と、その分析については、「Wireless World」の第7章に詳しい。

## 参考文献

◇ 家族関係 (編著者五十音順)

『システムとしての家族』(シリーズ 変貌する家族 3)  
上野千鶴子他 編, 1991, 岩波書店  
『家族関係学入門』 瓜生武 著, 2004, 日本評論社

『家族の構造と機能』 戸谷修著, 1972, 風媒社

『近代国家と家族モデル』 西川祐子 著, 2000,  
吉川弘文館

『子どもと家族』 濱野一郎+網野武博 著, 1995,  
中央法規出版

『「家族」と「幸福」の戦後史』 三浦展 著, 1999,  
講談社現代新書

『わかりやすい家族関係学』 山根常男他 編, 1996,  
ミネルヴァ書房

◇ メディア論・ケータイ論 (編著者五十音順)

『Wireless World』 Barry Brown 他編, 2002,  
Springer

『Perpetual Contact』 (邦題:絶え間なき交信の時代)  
James E. Katz, Mark Aakhus 編  
2002, Cambridge University Press,

『Intimate Connections: Contextualizing Japanese  
Youth and Mobile Messaging』  
Mizuko Ito/Okabe Daisuke, 2004,

<http://www.itofisher.com/mito/archives/itookabe.texting.pdf>

『Personal, Portable, Pedestrian』 Mizuko Ito 他編,  
近日(来春)刊行予定, MIT Press

『インスタントメッセージに関する研究』  
天笠邦一著, 2004,

慶應義塾大学総合政策学部卒業論文

『ケータイ学入門』 岡田朋之/松田美佐 編, 2002,  
有斐閣選書

『電話するアメリカ』 クロード・S・フィッシャー 著,  
吉見俊哉他 訳, 2000, NTT 出版

『古いメディアが新しかった時』 キャロリン・マーヴイン 著  
吉見俊哉他 訳, 2003, 新曜社

『携帯電話利用の進化とその影響』

モバイルコミュニケーション研究会 著, 2002

『メディア論-人間の拡張の諸相』 マーシャル・マクラーハン 著  
栗原裕, 河本仲聖 訳, 1987, みすず書房

『「声」の資本主義』 吉見俊哉 著, 1995, 講談社

『メディアとしての電話』吉見俊哉他 著, 1992,  
弘文堂

『メディア論』吉見俊哉／水越伸 著, 2001,  
放送大学教育振興会

『電気通信事業者協会(TCA)ホームページ』  
<http://www.tca.or.jp/>

◇ 理論 (編著者五十音順)

『出会い』(ゴッフマンの社会学 2) E・ゴッフマン著  
佐藤毅・折橋徹彦 訳, 誠信書房

『集まりの構造』(ゴッフマンの社会学4)E・ゴッフマン著  
丸木恵祐・本名信行 訳, 誠信書房

## 6. 謝辞

---

調査・研究のデザインから、大変示唆に富んだ  
ご指摘を頂き、さらに研究の環境を整えてくださっ  
た。

慶應義塾大学 政策・メディア研究科

小檜山賢二 教授

慶應義塾大学 環境情報学部

加藤文俊 助教授

横浜国立大学 教育人間科学部

岡部大介 助手

に、心より感謝いたします。

また、たくさんの励ましや、協力・アドバイスを、  
常日頃から下さった。

慶應義塾大学 小檜山賢二研究プロジェクト

慶應義塾大学 加藤文俊研究プロジェクト

“VANOTICA”

の皆さんにも、最大限の感謝のここに表し、論文  
の締めめに代えたいと思います。本当にありがとうご  
ざいました。今後ともよろしく願いいたします。

以上